



コソボのミトロビツァ市に架かる橋。橋の北部にはセルビア系住民、南部にはアルバニア系住民が多く居住し、橋の上では国連文民警察が警備している

実践! ★★★★★ 人間の安全保障

特定の民族・集団に 偏らない公平な支援を

幾度の紛争を経験し、国も人々も分裂してしまつた西バルカン地域。不信任や恐怖心という「恐怖」と社会サービスを受けにくい「欠乏」から人々が自由を手にするよう、JICAは中立・公平な立場で住民一人一人を重視した支援を行っている。

「政

治、民族、宗教が複雑に絡む」と言われる西バルカン地域ですが、バルカン事務所が担当する国のうち、アルバニア以外は旧ユーゴスラビアの国々で、もともと同じスラブ系民族が中心で言語も非常に似ています。そうした近しい人々が同じ国（連邦）で暮らしていたわけですが、南北の経済格差の問題や、厳格とはいえない宗教で分けた民族国家へ紛争という形で分裂する中で、敵対心憎悪が生まれ、人々が複雑化してしまいました。近いが故の複雑さがあるために、JICA事業を推進していく上では細心の注意を払わなければならないという難しさがあります。

紛争ははるか昔ではなくわずか10数年前の記憶なので、今が一見平和に見えても、当時を知る多くの人々の心中を思うと胸が痛みます。特にボスニア・ヘルツェゴビナは、ムスリムやクロアチア系中心のボスニア・ヘルツェゴビナ連邦と、セルビア系中心のスルプスカ共和国という国家内国家（エンティティ）を形成し、統治に関しては国際社会による強い関与が継続されています。少し前までセルビア系の中にはムスリム中心の首都サラエボに行くのを恐れた人がいたと聞きます。またセルビアでは、私たちが首都ベオグラードからコソボのアルバニア系住民居住地区に陸路で入る際、境界で運転手をセルビア系からアルバニア系の人に代える必要があり、同じ国内であっても、ここには不信任・恐怖心という大きな壁が感じられます。民族や宗教、歴史を利用して政治・経済的利益を優先した為政者・権力者に翻弄され、国という枠組みが大きく変化する中で、身近な人との争いで心身ともに大きな傷を負った人々への協力を考えるには、一人一人に直接光の当たる人間の安全保障の視点に立つ必要があります。

日本は、紛争直後にインフラなどの復旧を、また現在異なる民族の共同作業を通じて民族和解を促そうという支援を行っていますが、常に支援対象が特

定の民族・集団に偏らないように配慮してきました。紛争がまた起こるのではないかという不安を抱く西バルカン地域の人々に迫る脅威には、いまだに不信感をぬぐい切れない心の傷といった紛争による「恐怖」に加え、住み慣れた土地を離れざるを得ず、また故郷に戻れないという中で、今まで築いてきたものを失い、新たな社会サービスも受けにくいという「欠乏」があります。こうした状況から抜け出すために、民族・集団に関係なく一人一人に公平・確実に届く支援をどう工夫し、実践していくかが、対西バルカン地域支援の大きな課題なのです。

他ドナーは、現地のNGOなどを通じて住民の直接支援も行っていますが、私たちは、それらの方策も使いながら、同時に各国政府の自主性を促し、事業の継続性を担保するためにも、中央・地方の行政組織に日本の援助を認識してもらうことが重要と考えています。例えば、ボスニア・ヘルツェゴビナでは、まず複数の地方政府、次にエンティティの関係機関、最後に中央政府の承認が正式手続きとして必要になりますが、この間にはそれぞれの民族が複雑に介在するため、公式文書を一つ入手するにも膨大な時間がかかり、その文書が途中で止まるケースも多くあります。そんな状況だからこそ、「ここであきらめてしまつては本当に支援を必要とする人々へは届かない」と、私たちは事業実施のためにさまざまな工夫・知恵を搾り出そうとしています。

日本が戦後に復興し先進国の仲間入りをしたこと、また経済発展の中でも独自の文化を保っていることに、西バルカン地域の人々は敬意の気持ちを持っており、日本の中立・公平な立場が大いに評価されています。彼らがまた紛争という悲劇を繰り返さず、安心して暮らしていけるよう、日本の経験を生かした形で「一人一人の人間を中心とした支援」を行うことにより、近い将来、援助を卒業していつてほしいと私たちは願っています。